

# LANGUAGE ALIVE

—英語は生きている—

著 アラン・ブース  
訳 真崎良幸

みなさん、今日は講演にお招きいただきましてありがとうございました。おかげで大好きな九州に再び参ることができました。私は現在東京に住んでおりますが、機会を捉えては東京を脱出するのが至上の喜びなのです。この頃は九州に来る機会が多くなってきました。講演で来ることもあるのですが、他にも仕事で、今までに行ったことのなかった小さな町などいろんな所に行く機会がありました。私はここ2、3年の間、日本航空の「ウインズ」という機内誌に日本の民謡の記事を書いておりますが、そのシリーズの名を「人里離れた地方の民謡」といいます。東京から見れば九州は「人里離れた」ということになりそうですから、この仕事のために何度も九州に足を運んだことがあります。九州で講演を依頼されるときにはいつも講演日の3、4日前に来て、今までに行ったことのない地方で、その土地の民謡のことを調べたり、土地の人とお喋りしたり、彼らの生活を観察したりして、その土地と民謡の歌詩との間に何らかの関りがあるのかどうかを調べることにしております。たとえば、2年前、福岡で講演を依頼されたとき、数日前に熊本県の五木村に行きました。五木村はご存知のとおり人吉の北部にある小さな村ですが、あの美しい「五木の小守唄」でも有名です。私が訪問した時は盆踊りの時期でしたが、5日間ぐらいそこに滞在しました。その時に日本の歴史の暗い側面をかい見ました。五木村は、過去も現在も悲しい運命を背負ってきた村です。あの有名な「五木の小守唄」はとても美しい唄ですが、あれも初めは故郷の五木村を出て、八代や人吉に奉公に来た小守娘たちが唄ったものでした。NHKで大ヒットしたあの「お

しん」と同じなんですね。だから五木村での滞在はとても感慨深いものがありました。同時に、あんなにすばらしい自然の美に恵まれていながら、過去に暗い歴史を背負っていることを思うと、胸がつまる思いでした。それに追い打ちをかけるかのように、最近の新聞で、五木村はもう存在しなくなるということを知りました。新しいダムの建設が始まることになったのです。このため五木村の中心地、頭地は村として存続不可能になりました。残念ながら、あの美しい「五木の子守唄」のふるさは熊本県からなくなろうとしています。私が五木村にいたとき、村の住民にダムの建設についての意見をきいてみたことがあります。これは2年前の話ですが、五木村の半数の人たちはダムの建設に反対していました。この問題は、九州滞在中ずっと私の胸を絞めつけ、重苦しい気持ちになったことを覚えております。

今日はこうして熊本市にお招きいただきましたが、今回は長崎経由でこちらに参りました。長崎といっても市内ではなく高島という長崎湾の小島に3泊しました。高島といえば炭坑で有名ですね。現在も採掘されている日本最大の炭坑といえます。17世紀から続いてまいりましたが、19世紀にトマス・グラバーというスコットランド人の努力によって重要な産業になりました。グラバー亭は長崎の名所になっておりますが、彼は高島の「炭坑の父」と呼ばれています。この高島もまた気の重くなる所でした。島全体が工場と化し、炭坑夫のための薄汚れたアパートが立ち並ぶ憂鬱な光景でした。私は炭坑夫やその家族の人たちといろいろ話しましたが、民謡のことも話題にしました。高島にも民謡があるのをご存知ですか。もちろん熊本の民謡ほど有名なものではありません。今度、長崎県人の方とお会いになったときには、威張って熊本の民謡を誇ってもいいと思います。高島には「高島節」というのがあって、炭坑夫や家族の暗い歴史や辛い生活を描いています。ここでもまた最近、悲しい事故が起きました。新聞でみなさんをご存知でしょうが、先月の4月24日、坑内でガス爆発が起これ、死者11名を出しました。私が泊った高島の小さな旅館で風呂に入るとき、くずかごに新聞記者の撮った写真が捨ててありました。その写真は、爆発で亡くなった炭坑夫の葬式の模様を写したものでした。記者も私の泊った同

じ旅館に泊っていたのです。ここでも、五木村のときと同じように、九州の美しい小島に住んでいながら、悲しい運命を背負わされた人たちのことを思うとやるせない気持ちになってしまいました。高島を歩いていると遠くに端島という小島が見えます。この端島は軍艦島としてよく知られています。形が軍艦によく似ているところからこの名前がつけられたそうです。これは人工島といえる島なのですが、島にはビルや工場、校舎などが立ち並んでいます。高島の人たちから聞いた話ですが、昔、アメリカの潜水艦が潜望鏡でこの島を見たとき、軍艦と間違えて発砲したそうです。今日はみなさんの中にアメリカ人の方もいらっしゃると思いますので詳しい話はよしましょう。アメリカの軍事能力のお粗末さが暴露されますので。それはともかく、水平線にくっきりと浮かぶこの無人島はとても印象的でした。軍艦島が無人島になったのは1974年のことで、炭坑閉山のために炭坑夫とその家族は島を離れることになったわけです。高島から悲運の軍艦島を眺めるとき、一抹のさみしさがこみ上げて、目頭が熱くなってしまう。

さて、今日は熊本市の美しい美術館にお招きいただきましたが、今、高島や五木村のことを思うとなんだか別世界に来たような気がいたします。そこで、今日はそれにふさわしい英語教育という別天地のお話をしたいと思います。英語教育の話題になると、当然のことながら、日本の英語教育に焦点がしばられてしまいます。そこで、今日は角度を少し変えまして、今年私が訪問した三ヶ国の英語教育の現状から話を始めたいと思うのです。これらの国々はいずれも歴史的にも現在も英語が日常使われたり、学校で教えられたりしているところです。これらの国々をよく観察してみると、相互の事情の違いや、日本との相違点がくっきりと浮き彫りにされてきました。その三国とはマレーシア、タイ、そして太平洋上に浮かぶ小島で今ではミクロネシアの一部となっているカロライン諸島の一つ、ポナペイです。

マレーシアは以前はマラヤと呼ばれ、歴史の大半は大英帝国の植民地でした。1786年にフランシス・ライトがペナン島に植民地を拓いた時、大英帝国領となりました。これが1957年まで続き、その年に独立国となり、マレーシアと改名

されました。その間、大英帝国領でなかった時代がしばらくありました。それは、ご存知のように第二次世界大戦中のことで、日本軍がマラヤを占領していた時代です。しかし、170数年という長い間のイギリス支配のために、日常語として英語が使われております。マレーシアの原住民はそれぞれの言語を持っておりますが、英語は中学、高校及び大学での「指導言語」となっています。「指導言語」といいますのは、英語の教科だけが英語で教えられるというのではなく、すべての教科が英語で教えられるという意味なのです。このために、当然のことながら、日本の英語教育の事情とは著しく異なるわけです。マレーシアでは英語は日常の生活に欠くことのできない言語となっています。高い教育を受けた人の使う言語は英語であり、貿易にも、教育にも英語は不可欠のものなのです。さらにマレーシアは多民族国家でもあります。これはイギリス支配の初期の頃からの現象でした。それはイギリスが中国人やインド人をゴム農園の労働に使ったからです。多民族国家であるために、当然、言語も多種多様になってまいりました。今日でもマレーシアの言語事情は複雑で興味深いものとなっております。英語以外にもたくさんの言語があります。たとえば、中国語だけをとっても、少なくとも5つの言語があります。カントン語、ホッキエン語、テオ・チュー語、ホッカ語、そして、テレビやラジオで使われることばはマンダリン語です。インド語は少なくとも四つあります。南部インドのことば、タミール語、パンジャブ語、ブジャラナ語、それにヒンズー語です。また、オラン・ハスレー族のような原住民の話すことばもあります。さらに、マレーシア半島の重要な貿易都市マラッカでは古いポルトガル語が話されています。これは、この都市の近郊が昔、ポルトガルの領地だったことを物語っています。このようにマレーシアの言語事情は複雑で、興味深いものです。マレーシアは新しく独立した国ですから、国のイメージ高揚のために国語を英語からマレー語に変えました。つまり、今では英語は、日本と同じように、一つの教科としてのみ教えられているわけです。しかし、マレーシアの歴史的な事情と多民族国家故に英語はそれでも教育を受けた人たちの間では日常語として頻繁に使われています。マレー語よりも英語の方が通じる場合が多いのです。そこでマ

レーシアの英語を「環境の言語」と名付けることにしましょう。つまり、マレーシアは植民地だったために、歴史的な環境によって、英語が独特の地位を占める、便利なことばになってきたということです。多民族国家故に、教育を受けた人々の間で英語という共通語が必要だったわけでしょう。

太平洋上に浮かぶボナペイ島はある意味ではもっともおもしろい歴史を持っています。この国も外国の植民地になったのですが、ただ一国の植民地ではなく、四ヶ国から支配されました。第一の支配者はスペインでしたので今でもその面影が残っています。たとえば、私がこの島で出会った青年はドミンゴという名前でした。ドミンゴという名はボナペイ島固有のものではありません。もともとスペイン系の名前なのです。もう一つスペインの統治を髣髴させるものは、ボナペイ人の大多数がカトリック教の信者だということです。スペインの次にやってきたのがドイツです。ドイツの支配は1914年まで続きますが、これによって変わったのが日本でした。日本植民地下の終戦直前の頃、この島は飢と貧困で荒廃し、もうどの国の植民地ともいえないようになってしまいました。そして、戦後アメリカがやってきました。アメリカの植民地にはなりませんでした。が、委託統治領土となり、アメリカの後押しで産業や教育など、島の内部構造の建て直しが始まりました。こういう訳でこの国は支配者が続々に変わり、その結果ここでも言語事情は大変複雑で興味深いものになっております。さき程マレーシアの話をしたときにドミンゴというスペイン系の名前をもった青年に会ったことをお話ししましたね。ボナペイでは「まさお」という名前の人に会いました。「まさお」といっても日本人ではありません。50歳代の島の住民です。この人の両親あるいは祖父母が日本人だったわけでもありません。実際、彼の祖父はイギリス人でした。というのも彼の苗字がハドレーだったからです。彼の名前が「まさお」だったのは彼の中に日本人の血が流れていたのではなく、日本の統治の頃、島の子供に日本名をつけるのが流行っていたからでしょう。これもボナペイの言語のおもしろい側面を表わしているものだと思います。ボナペイの国語はボナペイ語です。キャロライン諸島とマーシャル諸島のそれぞれの島には独自の言語があります。しかし、もっと興味深いことは、ボナペイ

に住む50, 60代の古い世代の人たちの多くは、旧式の大変詩的で美しい日本語を喋るということです。この人たちは日本の統治時代に小学五年生まで日本人に習ったということです。彼らの日本語はとても上手で、私はびっくりしました。ある出版者の依頼で、私は不本意ながら、ある冒険をさせられました。出版者は、私にボナペイの一番高い山に登らせて、日本の占領以来初めて登ったガイジンに仕立てたかったのです。日本人は勤勉だったのでこの山に小径を作っていました。しかし、一週間もすれば小径はなくなってしまうほどの深いジャングルでしたので、もう昔の小径は全然見あたりませんでした。そこで私は案内人と一諸に鉋で径を切り開きながら、この恐ろしい山を登って行きました。案内人との会話は日本語でした。彼は54歳で、小学3年生まで日本人によって教育を受けたそうです。彼の日本語はかなりのものでした。ここでは日本語が国際語として通用した訳ですね。アメリカ人には悪いのですが、ボナペイの若者の喋る英語は、老人の喋る日本語と較べるとはるかに見劣りがしました。現在のボナペイの学校では英語で教育が行なわれています。しかし、この島ではあまり英語熱は感じられませんでした。古い世代の人が日本語を喋るように上手に英語が喋れる若者は数少いようでした。これには当然、それなりの訳があるのでしょう。日本占領軍の教育が浸透していたことも一つの理由にあげられるでしょう。ボナペイの英語教育を物語る例として、16歳の少女が英語の宿題をしているところを観察する機会がありました。彼女の教科書を見せてもらいましたが、その中に三つの質問がありました。その質問が変わっていたのでここに書き留めてきました。

1. 人間の実がなるというのはどういうことか。
2. キリストがお喜びになる5つの条件をあげよ。
3. 正義を行なうにはどういう条件が必要か。

一見してお分かりのように、これはミッション系の学校で使われている教科書の中からとったものです。たしかに、アメリカの委託統治時代が始まって以

来、ポナペイにはいくつかのキリスト教会ができています。その教会はどれも、ある程度は英語教育にも力を入れています。私が先程の質問を紹介したのは、このことを説明したかったこともありますが、もう一つの理由は、16歳の少女にとって、役にもたない不適当な英語だと思われたからです。それはともかく、ポナペイでは、英語はいわば「偶然の言語」だといえるのではないのでしょうか。つまり、たまたま最後の統治者のことばが英語だったというわけです。島の住民の反応はといえば、他のことばが過去において入ってきたのと同じように気軽な気持ちで受けとめたのでしょう。日本語の場合は、おそらくそうはいかなかったのでしょう。日本軍の占領時代を知る古い世代の人々は、昔は農業が盛んで、農業国としての基盤ができていたと過去を懐かしそうに語っていました。こういう感情は、アメリカの統治下では生まれなかったのではないのでしょうか。古い世代の人々の日本語の水準と、若い世代の人々の英語の水準の違いを較べてみると一目瞭然です。

最後にタイの話に移りましょう。タイでは事情が全く異なります。タイはヨーロッパの植民地になったことは一度もありません。多民族国家でもありません。もっとも、少数民族がいないわけでもありません。たとえば、カンボジアの方言であるクメール語を喋るクメール族がいます。タイに移民した中国人もたくさんいます。しかし私の感じでは、マレーシアにいる中国人はその特性を保っている一方で、タイの中国人はタイ社会に溶け込んでいるような気がします。タイの国語はタイ語です。しかし、タイは発展途上国の一つであり、他の諸外国、特に工業国との交易が重要となってくるために、英語は、日本同様に、教育の中で重要な科目と考えられています。日本と違う点は、タイでは新教育対策を打ち出して、学校も、出版社も、従来の文法、翻訳主義をやめ、コミュニケーションとしての英語に重点を置いた教授法を採用するようになったことです。ですから、今までのように文法とか、構文とか、語いなどの細かな知識に拘わる必要はなくなった訳です。日常生活や貿易に必要な実用英語が尊ばれるようになってきました。比較的、開発の遅れているタイで、日本では大革命と考えられるようなことをやっているのを見ると、驚嘆の念を抱かざるを

えません。そこでタイの英語を「必須英語」ということにいたしましょう。

さて、ここで三国における英語のあり方を整理してみましょう。マレーシアでは、英語は「環境の言語」、つまり、便利なことばということでした。今日のように英語が一般化したのは歴史的、社会的理由があるわけです。ポナペイでは、英語は「偶然の言語」でした。たまたま、最後に統治した国の言語が英語だったというわけです。タイの英語は「必須言語」といえるものです。タイは発展途上国として貿易や文化の面で外国と交流を計る必要があるわけです。この三国を例にあげたのは、外国語の採用は、その学習法や教授法も含めて、非常に複雑な要素がからみ合って生まれたものだということを指摘したかったからなのです。やぶから棒に「さあ、国際化の時代だ。英会話を学ぼう」なんていうどこかの国とは違います。どの国も複雑な要因がからみ合っているのです。一つの要因は歴史的なものです。つまり、英語圏の国から植民地化された過去があるかどうかということです。社会的要因もあります。その国が単一民族国家であるか多民族国家であるかによっても違うわけです。マレーシアのように多民族国家の場合は、外国語が多民族間のコミュニケーションの潤滑油としてどれだけ利用できるかという問題があります。また、心理的な要因もあると思います。たとえばタイの場合、世界の工業国の仲間入りをしようとする新しい動きがあります。このために英語が必要になってきます。さらに、（私は人種や国家の一般論をいうのは嫌いです）タイの人々はおそらく仏教という宗教のおかげだと思うのですが、なんら摩擦なしに世界の国々と付き合う方法を心得た民族のように思えるのです。つまり、流れに逆らわず、“No”という返事よりも“Yes”と進んで言おうとする国民なんですね。すべてを肯定しようとするすばらしい気質を持った国民だと言えるようです。こういう心理的要因があるために、タイではこれからも英語を主要外国語として使っていくことでしょう。

さて、今度は日本の状況を見ていきたいと思います。まず第一に感じるのは、今まで述べてきた三国の要因はどれも日本にあてはまらないということです。日本では全く違った英語教育が行われています。歴史的に見ても、日本が外国



の植民地になったことは一度もありません。たしかに、外国との交流はありました。外国文化が日本文化に影響を与えたのも事実です。短期間ではありますが、アメリカ軍による占領も経験しました。しかし、植民地にはならなかったのです、学校で英語が「指導言語」になったためしは一度もありません。もちろん、インタナショナル・スクールのような私立の学校では英語が「指導言語」として採用されていますが、その数は微々たるものです。歴史的に見ると日本はマレーシアやポナペイとは全く違います。社会的に見ても、日本人は単一民族ということを病的なまでに誇っていますが、たとえば、沖縄の人とかアイヌの子孫と話すと、必ずしも日本人は単一民族ではないということがわかります。しかし、比較的単一民族性が強いということで今まで日本語という国語一本で通ってきました。たとえ青森県の人が鹿児島弁はわからないと言ったとしても、ガイジンの私にはちゃんとわかります。今では、テレビ、ラジオ、映画等の影響で日本全国標準語で通用する時代です。みんなが標準語を喋っているわけではありませんが、少くともだれでもわかるのはたしかでしょう。この単一民族と単一言語という特質が特種な文化をつくり出し、マレーシアの国とは全く違った、独特の環境が生まれているわけです。また、日本はもはや発展途上国ではありません。もう超大国の一つです。世界第2位の GNP を誇る大国になっているのです。だから外国との溝を埋める必要などさほど感じないわけです。ジャーナリストや政治家がよく言っているでしょう。「外人にもっと日本を理解してもらわなくては」とか「日本はもっと国際的にならなくてはいけない」と。これはその場しのぎのことばでカモフラージュしているにすぎないのです。日本は非常に自信を持った強力な国であり、このことは日本も十分承知しているはずです。パリに行くと日本のデパートがあります。決してタイのデパートなどはありません。ロンドンのセビル・ローにスーツの注文に行くと店の窓には「日本語でどうぞ」という掲示があります。「タイ語でどうぞ」とか「ポナペイ語でどうぞ」とか「クラジャラティ語でどうぞ」などという掲示はどこにも見あたりません。こういうふうに見てくると、日本はあらゆる意味で、先程述べました三国とは全く違った立場にある国といえるようです。もう一つ日

本が他の国と違う点は心理的な面です。日本はユニークな国だと病的なまでに信じ込んでいる人が多いようです。たとえば、角田忠信博士という方がつい最近出版された本の中で、日本人の悩は外人の悩とは違うことを「証明」されたそうです。私は医者ではありませんので角田博士の研究成果にどれだけ信ぴょう性があるものかはわかりませんが、ただ一ついえることは、これもまた日本人のユニーク病の一つだということです。私は日本に来てもう15年になりますが、日本人はたえずガイジンとは違うということを主張します。「われわれ日本人はこういうもの。ガイジンはああいうもの」というわけです。しかし、これは必ずしも悪いことではないのかも知れません。日本人の強さの根源がおそらくこのへんにあるのかも知れませんね。特に終戦後の廃墟から不死鳥のように立ち上がったのも、このユニーク病のおかげだったのかも知れません。日本人にとって、将来の経済大国構築のためにはこのプライドが必要だったのでしょう。私は今日、ここで世界を驚嘆させた日本の奇跡的な経済発展についての講演に来たわけではありませんが、あの奇跡といわれる経済復興の原因の一つに、この日本人のユニークさがあげられてもおかしくないと思うのです。しかし、時に、このユニークさというものはばかげた意味を持つこともあるのです。たとえば、ときどき日本人からこう質問されます。

「日本には四季があるのをご存知ですか」わたしは「そうですね。イギリスにもありますよ」と答えると、「ああ、そうですか。四季があるのは日本だけだと思っていました」というのです。こういうとき、ユニークさを誇るというのがばかばかしくなってしまう。特に、ことばに関してのユニークさというものは決してプラスの要因にはならないものです。この日本のユニークさというものは、強大な経済大国ニッポンを築きあげる原動力とはなったものの、世界とのコミュニケーションにおいては決して歓迎されるものではないのです。むしろ、この自己中心的な態度は国際交流には危険な障害になるという人もいるくらいです。もし、この説が正しいとすれば、日本での英語教育の障害となっている一つの原因もここにあるのかもしれませんが。私には、この日本のユニークさというものが外国人に対する見方を歪めているように思えてならない

のです。日本人が外国人を見る見方には二とおりあるようです。一つは危険人物として、もう一つはおもしろおかしい「へんなガイジン」としてです。今、毎日のようにテレビに「へんなガイジン」が出て視聴者を喜ばせていますね。たとえば、カラオケ大会でガイジンが演歌を歌って大喝采を受けます。日本人にはこういう光景がたまらなく嬉しいようです。私の友人も私にカラオケ大会に出る出るといって勤めるのですが、今のところ、どうにか難をのがれています。でも、いつの日か、私にもお鉢がまわってくるのではないかと、毎日眠れない夜を過ごしております。まあ、それは冗談ですが、こういう現象は日本人がガイジンをおもちゃ扱いしている一つの比較的害の少ない例といえるでしょう。以前、「ブッシュマン」という映画が日本で大ヒットしましたね。この映画の主演は優しい顔をした、おとなしいアフリカ人でした。彼は、興業のため日本に連れて来られ、槍を持たされ、上半身裸でデパートやテレビ・スタジオに引っ張りまわされました。これを見て、日本人はこういいました。「ほら、アフリカ人よ、見てごらん。おもしろいじゃない」こういうふうに、ガイジンは、その存在だけで日本人の慰みものになるようです。

しかし、また一方、ガイジンは危険人物にもなるのです。芸能界やスポーツの世界から例をあげてみましょう。相撲の世界で、小錦が幕内から三場所目で小結まで上がったのは相撲史上初めての快挙でした。その後、週間誌に小錦のちゃんこ鍋に毒が盛られたという記事が出ていました。また、野球の世界でも、ブーマーがガイジンで初の三冠王に輝いたとき、日本球界のコミッショナーたちは、ガイジン排斥運動を始めました。このように、ガイジンは、おもしろおかしい、害のない「へんなガイジン」であるか、あるいは「危険人物」のどちらかでなければならないのです。これと同じことが英語に関してもいえるように思われます。つまり、英語は「おもしろおかしいことば」か「危険思想をもたらすことば」かのどちらかなのです。英語が危険だった時代はもう過ぎ去ってしまったようです。しかし、昔は切実な問題でした。ご存知のように、明治時代、時の文部大臣、森有礼は国語を英語に変えようと提案しました。今考えてみると、ばかげた提案のように思えますが、当時は深刻な問題だったし、そ

んなことになれば日本は危険に陥ると、危惧した人が多かったことでしょう。しかし、今日の日本の社会では、英語はおもしろおかしいことばだと考えられているようです。たとえば、子どもたちが通りでガイジンを見ると *This is a pen.* と叫びます。私は日本に来て以来15年間このジョークをきかされていますので、もう笑う気にはなれません。また、広告会社や風俗雑誌社などが英語を使うときも、その英語は単なる飾りとしての意味しか持っていないのです。英語はまじめに扱われていることばではなく、ファッション性のある、「かっこいい」ことばにすぎないのです。私は東京で、石川啄木にちなんだ「啄木亭」という小さな飲み屋によく行きます。私はこの店の常連客になったので、ある日、店の主人から啄木の詩を英訳してくれないかと頼まれました。なんでも、店の割箸入れに印刷したいからということでした。私は「やりましょう」といって翻訳したので、その作品が割箸入れに印刷されました。ところで、この飲み屋に来る人たちはかなりのインテリの若者が多いのです。ジャーナリズム関係の仕事をしたり、出版社に勤めたり、大学生だったりして、ここは高い教育を受けた人たちの集まる場所です。私は座って、私の英訳と啄木の詩を読み較べている客の姿を見ることがあります。そして、「この英訳はどうですか。正しい訳でしょうか」ときいてみます。すると、返ってくる返事は必ずといっていいほど「さあ、ぼくは、英語はさっぱりなんでね」というのです。そして、全然恥しそうな態度もみせない。むしろ、誇らしげにいうのです。「おれには英語なんて関係ないよ。おれは日本男児だ。毛唐の使う英語なんて糞くらえだ」とでもいいかげんですね。そして、こういうことをいう人たちは決まって大学生か、大卒のエリート・サラリーマンだということです。この人たちは高校、大学で少なくとも6年間、または8年間の英語教育を受けた人たちなのです。それでも英語ができないことが誇りだと思っている。これが本心かどうかはわかりません。本当は少しはわかるのだけれど、わからないふりをしているのかもしれませんが。ここで興味深いことは、日本人は人前では英語がわからないという態度をとった方が落ち着けるのだということです。さて、日本では、私が最初にあげた国々のように、英語は実用的で有益なことばなのでしょう。

これまでは、英語がなぜ社会で教えられたり、使用されているのかということ話を話してまいりました。みなさんは英語の教師でいらっしゃると思いますので英語をいかに教えるべきかという問題はよく議論の対象になってきたかと思います。そこで、今から私の実際の経験から、日本での英語教育の例を三つあげてみたいと思います。この三つの例をそれぞれ名づけて「日の丸英語教授法」、「大学キョウジュ法」、そして「ロボット教授法」にしたいと思います。

私が「日の丸英語教授法」に遭遇したのは東京の大手出版社から英語教科書ワークブックの校閲を頼まれた2、3カ月前の話です。このワークブックは文部省検定教科書に準拠したものでした。ですから、日本の中学英語教育の中核をなしているともいえるものです。そこで、このワークブックに目を通してみますと、例文や練習問題がはなはだ現実離れしているといわざるをえませんでした。ここに出てくる英語は私が普通使うような英語でも、他の外人が日常使うような英語でもありません。一つ例をあげてみましょう。中学一年生用のワークブックの始めのほうにこういう文がありました。

I come on Monday.

この文は非常に簡単な文ですので語学教育の教科書の始めに紹介する文としては適当なものといえます。著者は最初に最も簡単な英文を紹介して主語＋動詞＋修飾語という構文を教えたかったのでしょうか。しかし、この文の唯一の難点は意味が通じないということです。みなさんには通じますか。この意味は「毎週、月曜日に来る」というもののでしょうか、それとも「今度の月曜日に来る」というのでしょうか。もし、後者の意味なら動詞の時制を変えて、

I'll come on Monday. あるいは、

I'm coming on Monday.

としなければなりません。それでは、この月曜日というのは毎週月曜日にとい

うのでしょうか。たとえそうだとしても、やはりこの文は間違っています。その意味なら、

I come on Mondays.

と Monday を複数形にしなければならないからです。この簡単な例文は第一文型の典型的な文章です。覚え易いし、分析も簡単。単語も簡単、構文も簡単です。しかし、意味が全然わからないのです。文脈ありません。この文を見た外国人は「この人はいったい何を言いたいのだろう」といぶかしく思うことでしょう。脈絡のない英文がぼつんと水平線上に顔を出しているのです。まさに、軍艦島さながらですね。こういう例がこのワークブックの中にわんさかあります。もう一つ例をあげてみましょう。

Which is Tuesday?

私は冗談をいっているのではありませんよ。これは本当に活字になっているものなんです。「火曜日はどれだ」なんて意味がおわかりですか。臨済宗の禅問答みたいです。

What is the sound of one hand clapping?

(片手で拍手をするとどんな音がでるか)

さあ、みなさん答えられますか。こういった英文の例は、英語は文法にかなっておればいいのだと思い込むところに落とし穴があるのです。日本の英語教育がこの種の英文に基盤をおいているところに大きな問題点があるようです。

しかし、もっとひどいのは「大学キョウジュ法」なのです。これも実際にあった話です。私は出版社から、校閲だけでなく、レコーディングも頼まれることがあります。その結果、みなさんの学校でも私の声がおじゃましているかも

しませんが、どうぞお許してください。先日、かなり難しい大学生用のテキストをカセット・テープにレコーディングしました。この本はソ連の作家、アントン・チェコフの物語を英訳したものでした。レコーディングは首尾よく終わり、いつものように手薄い手当をもらって帰りました。それから6カ月ぐらいたって、もう忘れかけたころ、出版社から電話をもらいました。「この前のレコーディングについて話がありますので会社までお越し願えませんか」というので、私は「ははあ、読み方があまりにもすばらしかったのでボーナスをはずんでくれるのかな」と思って、いそいそと出版社に出向きました。すると、そこには有名大学の教授様が座っていらっしゃるではありませんか。彼は不機嫌そうな顔で言いました。

「君の読み方ではだめだよ」

私は、

「それは失礼しました。それで、どこが悪いのでしょうか」

この教授は1917年発行のダニエル・ジョーンズ発音辞典の初版本を私に見せるのです。この本はなかなか手に入るしろものではありません。でも、この教授も劣らず変わった方でした。彼は、私がこの辞典通りに発音しなかったといって怒っているのです。私はこのとき「レコーディングなんかやめた」と決心して物書きになった次第です。彼が指摘した一つの単語は *translate* でした。これを [trænzleit] と発音すべきであって [trænsleit] ではないということです。あるいは、その逆だったかもしれません。とにかく、私がダニエル・ジョーンズと違った発音をしたということで大目玉なのです。これが「大学キョウジュ法」の中味です。この教授は、現実離れをした、重箱の隅をつつくようなことばかりにとらわれて、実際に外国人がどんなしゃべり方をするのかということなどは一切問題にならないようです。みなさんがこの話をきいてお笑いになったのは嬉しいことですが、もっとひどい話があるのです。それが「ロボット教授法」なのです。

これも、つい、このあいだあった話です。2、3週間前、またレコーディングを頼まれました。今回は出版社からではなく大手電気会社からでした。社名

は伏せておきますが、ヒントだけいっておきます。「ソ」で始まって「ニー」で終わる会社です。そこで、この会社が最近「リピーター」という機械をつくりました。ピストルと間違えるような名前ですがそうではありません。語学学習用の機械なのです。まだ、市場には出回っていないかもしれませんが、これは英語を何度も聞いて練習できるレコーダーです。中に入れるソフトウェアの大きさが名刺ぐらいのものでした。カード付帯の磁気テープに英文が録音されているわけです。カードを機械の中に入れると英文が聞こえてくるという仕組みです。何度も繰り返して聞くことができます。だから「リピーター」という名がついているのでしょう。さて、この「偉大な発明品」の会社が私にカードの模範文を読んでくれというわけです。今ここで私がどんな英文を読まれたのかをみなさんにお教えします。次の英文は世界に誇る一流電気会社が発売予定の「リピーター」の中味です。まず、第一の文はこうでした。

Suffice it to say that I think they are on the right track here,  
and that their results will mean revolutionary changes.

(それらはこの分野で正しい方向にあり、その成果は革命的变化をもたらすことだろうと言うにとどめておこう)

悪くない文章です。わたしは「いいでしょう。録音しましょう」と言って録音しました。そのときこの文章を読んだ時間が7・8秒でした。するとスタジオの中はしらけた雰囲気になり、「7・8秒ですか。これを4秒で読んでほしいんですけど。もう少し早く読んでください」と言われました。私は我慢して、もう少し早く読みました。今度は、「6秒ちょうどですね。すみませんが、もう少し早く読めませんか」。私はばかばかしい程早く読みました。「4・7秒ですね。すみませんけど4秒でお願いします」。私は誰にも意味がわからないくらいに早く読みました。すると「ああ、ちょうどいい」。ということで私が読むことになっている英文を全部4秒で読めというわけです。これを見ただけでも日本の英語教育の程度がわかるというものです。次の英文も読んでみましょう。



It permits us to maintain the highest quality control standards in all our installations.

(このため、わが社すべての装置において最高の品質管理  
ができるわけです)

6・5秒でした。だめだめ。きっかり4秒で読まなければならないのです。次の英文はどうでしょう。

How long are you going to be gone?

(どのくらい留守にされるんですか)

これは簡単ですね。2・3秒で読めました。すると、

「すみません。もう少しゆっくりお願いします」

これじゃあまったくお話になりません。これが「ロボット教授法」です。「お笑い教授法」とでも名づけたほうがよかったかもしれませんね。私がこういう例をあげたのは、日本では英語があまりにも現実とかけ離れ、まじめに考えられていないことを指摘したかったためなのです。日本の英語の非現実性は高島から軍艦島を見るのによく似ています。英語が水平線上にぼかんと浮かんではいるからです。明治時代は英語が真剣に考えられた時代があったのですが、今は違います。そこで、英語がこんなに奇妙で非能率的な方法でしか教えられていないのには何か訳があるのかもしれませんが。私には見当が付きませんが、もういっそのこと、英語教育なんてやめてしまっはどうでしょうか。マレーシアやタイ、ポナペイのような国で英語を習得しているような必要性が日本にないのなら、やめてしまえばいいのです。日本の英語教育が今でも存続するのは情性からです。英語教育は今や巨大な産業と化しています。もし、これをやめてしまえば、私たちはおまんまの食いあげです。失業するのはみなさんだけでなく、たくさんの大学教授や、出版社や、私のようなテープ吹き込み者にまで及びます。ああ、恐ろしや、恐ろしや。いや、そんなことになってはたいへん

です。やはり英語教育は続けよう。結果はどうなってもかまわないんだ。教授法がばかげていようと、非現実的であろうとかまうものか、というわけです。

あるいは、日本の英語教育は外国に対する一つのポーズなのかもしれません。中曽根さんが黒字減らしのために外国製品を買うポーズをとるのによく似ています。このポーズもまったく見えすいているのですね。中曽根首相は三越デパートへ行って何を買ったと思いますか。フランス製のスポーツ・シャツを買うのです。そんなことは誰も頼んでもいないのに。日本と外国の貿易の不均衡はそんなことをやっても何にもならないのに。しかし、中曽根さんのこのポーズは政治的に必要な策略なのです。彼は外国に向かってこう言いたいのです。

「見て下さい。日本人はいつも外国製品を買っているのですよ。先週も家内はグッチのバックを買ったし、私はフランス製のスポーツ・シャツを買いました。黄色の地にオレンジの縞模様が入っているです。私には全然似合わないし、私の趣味でもないのだけど、外国製品だから買っているんですよ。どうです、日本人の心は広いでしょう」

私はときどき、日本の英語教育もこれと同じポーズなんだなと思うことがあります。

「日本人は国際性を目指し、すべての学校で英語が学ばれています。ご覧ください。ソニーが英語を二倍の速度でしゃべる機械を発明しました。大学教授も勉強熱心で、1917年版の辞典を片時も離さず後生大事にして頑張っています。日本人はこんなにまでして国際的な国民になろうとしているのです。英語はもう私たちにとって生活の一部となっております」というしらじらしい声が聞こえてきます。

今日私がお話したことは100パーセントまともに受けとめてくださらなくてもけっこうです。結論として、日本の英語教育を炭鉱にたとえてみました。炭鉱は、かつては日本でもイギリスでも未来を築き、世界を救うエネルギーと

して重宝がられていました。他の産業にとっても石炭は重要なエネルギー源でした。だからこそ今でもイギリスで、炭鉱夫のストは強力なもので政府も恐れている程です。古い因習はなかなか消えるものではありません。しかし、昔は石炭しかありませんでしたが、今では違います。新しいエネルギー源が発見され、日本でもイギリスでも多くの炭鉱夫は失業に追い込まれているのです。炭鉱はかつての栄光を失ってしまいました。もう時代錯誤の感さえあります。現代のようなコンピューターの時代では、炭鉱は、ちょうど蒸気機関が発明された時代と同じように、古い遺物となってしまった感があるのです。そこで、現代の日本の英語教育も将来、炭鉱と同じ運命を辿るだろうと予言するのは極端すぎるでしょうか。昔は英語によるコミュニケーションが日本の発展の鍵を握っていました。明治時代の人たちはこう言ったでしょう。「日本人は世界にはばたかねばならぬ。それには英語が不可欠なのだ。ガイジンに日本語を学ばせることなど不可能なのだ」と。しかし、時代は変わってきました。日本語をしゃべる外人もふえてきました。パリのデパートでも日本語のできる店を置くようになっています。イギリスの仕立屋でも「日本語でどうぞ」という看板があちこちに見られます。日本は強大な国になったのです。しかし、それは英語のできる人がたくさんいるからではありません。日本は英語の堪能な人を多数求めてはいないのです。ほんの一握りで今までうまく乗りきってきました。

そこで現在の日本の英語教育はこれからも炭鉱と同じように細々と続いていくのでしょうか。それとも、高島の人々が水平線上に浮かぶ軍艦島を眺めるように、過去の遺物としてとらえるようになる時代がくるのでしょうか。軍艦島は今は無人数島ですが、栄光ある過去がありました。ここで実際に働いたり、生活した人たちがいたことを思うと昔が懐かしく偲べれます。しかし、今では誰もいないという事実は、私たちに一抹の寂しさを与える一方、お荷物がなくなって、晴々したという大きな喜びをもあたえるものではないでしょうか。